

2022年
1月3・10日 No.1641



週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>

潮流

寄付金をどう役立てるか？ 子どもたちが決める授業

NPO法人 日本ファンドレイジング協会代表理事 鵜尾雅隆



資料

「地域における新たなスポーツ環境の構築」ほか

——スポーツ庁

CONTENTS

▶ 2 潮流

寄付金をどう役立てるか？ 子どもたちが決める授業

鵜尾雅隆(NPO法人 日本ファンドレイジング協会代表理事)

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○理科を加え、4月19日に全国学力調査実施へ
編集部

○地域でのスポーツ指導、教員の兼業兼職可能に
編集部

▶ 8 AI人材を育てる「情報」入門講座

基本統計量の見方を知り、活用につなげよう
渡辺美智子(立正大学データサイエンス学部教授)

▶ 10 特別企画

新しい時代の学校施設の今後の検討課題は？

▶ 12 校長講話

瞬時のワンポイント講話・その②

保護者に伝える子どもたちの姿

野口晃男(前盛岡大学非常勤講師、元岩手県盛岡市立中野小学校校長)

▶ 14 私たち、子どもの全力サポーター！

教えられる立場から教え方を分析してみた
大橋すみれ(公認心理師)

▶ 16 実践！ 校長塾

学校改革5カ年計画①

教育課題解決に向けて

河野安勝(千葉県立長生高等学校校長)

▶ 19 資料

「地域における新たなスポーツ環境の構築」ほか
スポーツ庁

▶ 35 廊下はぶつからないように歩けばいい

大人の自分がほんの少し変わること

木村泰子(大阪市立大空小学校 初代校長)

▶ 36 ヒロセ教育事案研究所

【免許更新制廃止】

歴史的な大失策の後遺症は癒えない

廣瀬裕一(上越教育大学名誉教授)

▶ 38 向山行雄の管理職選考 合格への道

人間理解力① 人を見抜く眼力

向山行雄(敬愛大学教育学部教授・教育学部長)

▶ 40 玉置崇の学習指導要領 現場での生かし方

対話を支える子ども同士の関係性が大切

玉置 崇(岐阜聖徳学園大学教育学部教授)

▶ 43 教育問題法律相談

学校設置者に求められる医療的ケア児への対応
三坂彰彦(弁護士)

▶ 44 通信・議会質疑

英語教育②

▶ 46 変わる教育委員会

福生市立学校の不登校総合対策②

石田 周(東京都・福生市教育委員会教育長)

▶ 48 元中学校長 浅田所長の文科省日誌

令和4年度予算案の対応で奔走

社会教育実践研究センターから発信

浅田和伸(国立教育政策研究所長)

▶ 50 BOOK

『立花隆 最後に語り伝えたいこと 大江健三郎との対話と長崎大学の講演』

『子育て罰 「親子に冷たい日本」を変えるには』

▶ 51 自著を語る

『教師のこんなことしたい！を実現できる

ICT「超かんたん」スキル』

和田 誠(愛光中学校・高等学校教諭)

▶ 52 マイオピニオン

世界に誇れる日本教育へ

小松郁夫(国立教育政策研究所名誉所員)



撮影：浅葉美穂

潮流

NPO法人 日本ファンドレイジング協会
代表理事
うおまさたか
鵜尾雅隆さんに聞く

寄付金をどう役立てるか？ 子どもたちが決める授業

日本の寄付文化の醸成のため、
社会貢献教育の充実が急がれる。

その中で今、実践的かつ
先進的なプログラムが
全国の学校で注目されている。

課題解決力の育成のために

「困ったとき、助けてくれる人がいる。そう信じられる社会を実現したい」

元JICA職員の鵜尾雅隆さんが抱いたその思いから、日本ファンドレイジング協会は設立された。日本において、寄付や社会投資を活発にするにはどうしたらよいのか？ 2009年、全国580人もの発起人の賛同を受けて、社会貢献の仕組みづくりのプロジェクトが始まった。

法人名の「ファンドレイジング」は資金調達の意味で、主に民間非営利団体で活動する人たちを「ファンドレイザー」と呼ぶ。その役割は、「社会のために何か役に立ちたいと思っている人たち」と「社会の課題を解決している人たち」をつなぐことにある。多様化し複雑化する社会の課題は、もはや行政だけでは解決できず、民間、市民の力が不可欠だ。そこにファンドレイザーの活躍の場がある。日本ファンドレイジング協会では、ファンドレイザーの資格認定のほか、社会貢献教育のファシリテーターの育成などにも取り組んでいる。

鵜尾 SDGsをはじめとする社会の課題を学ぶ時間は、学校でも今や必須だと

思います。ただ、それを解決するには何ができるか？ となると、なかなか学ぶ機会が少ないかもしれませんね。

寄付やボランティアを経験している子どもたちも増えていますが、寄付の相手を自分で考えて選ぶことや、喜んでもらえたと実感できる体験を積み重ねることが大切だと思っているんです。何をどう具体的に行えば、社会の課題を解決することにつながるのかということを小さい頃から学んでほしいのですよ。そのため私たちは、社会貢献教育プログラムを全国336教室で、1万人を超える子どもたちを対象に行ってきました。

鵜尾さんたちが今もっとも力を入れているのは、「Learning by Giving」というプログラム。これは、寄付先の候補となるNPOを子どもたち自身が調べるところから始まる。その後、約10時間かけて社会課題を学び、子どもたち同士で議論しながら、寄付先を選択していく。そして、最終的に選んだNPOに実際に寄付金を届ける。

模擬レッスンではない。寄付者から実際にお金を預かるリアルな活動だ。寄付の意欲や価値を考え、主体的に決断することで、子どもたちは大きく成長していくという。

同協会のサイトでは、中学校や高校で行った「Learning by Giving」の事例を動画で紹介している。

鵜尾 3分程度の動画なんですけどね、学校の先生方にはぜひご覧いただきたいです。実際にお預かりしたお金をどこに寄付するか決めるんですから、子どもたちの心には社会に対する責任感が芽生え、議論もすごく真剣になります。

寄付先を一つに決めていくその過程で、それぞれのNPOで日々活動する皆さんの熱い思いに触れることもできます。社会貢献とは何かということや、自分の生き方そのものについて深く考え始める姿も見られるんですよ。

「正解」がないからこそ考える

「Learning by Giving」は日本では非常にユニークなプログラムと言えるが、海外では「フィランソपी」つまり社会貢献活動教育として、寄付やボランティア体験は、学校の教育活動の中で当たり前に行われているという。

また、鵜尾さんによると、国際バカロレアの教育プログラムには「サービス」という内容があり、学んだことを社会問題の解

決にどうつなげ、どう貢献するかという観点が一つの核になっているそう。

一方、日本では、社会貢献教育のプログラムは、これまでの位置付けとしては、学校の設定教科・科目や「総合的な学習の時間」、または教科の選択の時間などを活用して取り組むケースが多い。その場合、やや問題なのは、教員が「正解」を与えることもまま見られることだ。生徒が主体的に考える「Learning by Giving」には、正解はもちろん存在しない。

鵜尾 「正解」がないものは考えない、という現状を放置しておくと、子どもたちの人生を豊かなものにする機会を見逃してしまうと思うんですよ。

例えば中学生に対して、いきなり「起業」の計画を考えさせるのは難しいのですが、「社会のためになることを考えて」とか、「川の清掃活動や地元の商店街を盛り上げるためのイベントを考えて」と言つと、熱心に考え始めます。誰かが喜ぶ企画を考えることは、中学生にとってやりがいのあることですからね。

こうした時間を作ることで、社会とつながる活動を考える企画力が少しずつ育ちますし、「自分は何かができるのか」と

いう自己理解も深まります。つまり、社会貢献教育プログラムは、自分発見プログラムでもあるのです。それは同時に他人を知ることにもなり、同級生の新しい面を発見したりすることで、どんどん学習にのめり込むようになるんですよ。

寄付先の選択を子どもたちに託すというこの社会貢献教育プログラム。これが全国の学校で少しずつ実践が広がれば、社会に大きなインパクトをもたらすだろう。

その場合、寄付元をどう確保するかがハードルと見られるが、鶴尾さんは「遺贈寄付」と「学校のある地域からの寄付」が大きな原資になると考えている。遺贈寄付については、すでに問い合わせが年間1000件ほどあるそう。また「地域のために使ってほしい」という人たちからの寄付も、寄付先を学校の子どもたちに託してもらうことで新しい寄付の形が創造できる。

若いうちに素晴らしい体験を

前述の通り、「Learning by Giving」は、同協会が寄付提供を受け付け、寄付先を子どもたちが調べ、自主的に選択する仕組みだが、将来的に一つの進化形として、子どもたち自身がバザーを開いたり、チャ

リティーコンサートを企画したりして、その収益金や寄付金を社会貢献の原資にするなどの活動も、鶴尾さんは視野に入れているそう。

鶴尾 子どもたちが寄付金を集める側に立って、そのアイデアを考えると、いう試みも海外ではすでに見られます。

例えば、スマートフォンで買物をしたり、地下鉄やバスに乗ったりすれば、ポイントが貯まりますよね？ これを多くの高校生に協力してもらい、商品券や現金に交換してもらうことで寄付の原資にすることも考えられます。

チャリティーコンサートなどは、プロのミュージシャンを呼ぶのではなく、高校の文化祭などで自分たちが演奏するイベントを開くということです。そこで集まったお金を、例えば地域の高齢者施設などに寄付する活動までつなげることができたら、達成感や自己肯定感がとても高まるのではないのでしょうか。

高校などの文化祭だと、自分たちの保護者や親戚、地域の人なども参加してくれますので、そのこと自体もうれしいのですが、自分たちが考えた企画をみんなで応援してくれて、その自分たちがさら

に誰かを応援できるという体験ができません。ぜひ若いうちに、そうした素晴らしい経験をしてみたいと思うのです。

子どもたちが自ら原資を集めるのは最終的な目標だが、現状、同協会には寄付の原資が集まっており、子どもたちが「Learning by Giving」の体験ができる環境が整っている。つまり、いつでも学校側からの要望に対応できる状況にある。また、全国の先生方と連携して、このプログラムを実施に結び付ける社会貢献教育ファシリテーターなどの人的な体制も整っている。

鶴尾 これまでの実践では、子どもたちが大きく成長し、社会や自分自身に対して前向きな気持ちを強く持つ例を見てきました。ぜひ興味をお持ちの先生方には、このプログラムを活用していただきたいと思っています。

私たちが認定しているファンドレイザーは、社会全体と困っている現場、困っている人をつなげるパイプ役を果たし、それを専門職にしている人たちです。こうした仕事もあるということも、広く知っていただけたらうれしいですね。

日本ファンドレイジング協会 || <https://jfra.jp/>